は未だに其の影だに見せず 製造業者は勿論小舟、地

は四月中旬の水温に當つ

て居る而し低い年柄でも

是を高い年に比較する時

十四度臺であつた。

網業者は全く失業の有様

が如きは、一大事と當業者

憂慮せるを以て當局者に

三四度)に達して中旬頃 九月上旬には最高(二十 となつて、八月下旬より

尚銚千測候所の報告(相 より一樣に下降を辿る。 へて餌料さへも得られざる

、殊に鰹漁期を目前に控

も低き時も二十二度前後 急激に上昇して、高い年 七月中旬になると水温は

其の原因を問ひ糺せば

も笑へば鳥さへも囀る 氣溫十二三度になれば非

第

ぬが如い本年は未だ海洋 温にならなければ來襲せ

に春が水の結果であらう

昨年に較れば二三度以上

い低い年柄で、十四年や

ヒスーフ

小

平

君

|標的縣會議員をバスし、消|々々の一路を辿りしも、今|只一言君に苦言を呈せんと

|漸く今不惑の働き盛りであ|船の建造にも着手するとか|の代議士としての用意と準

金持で剩さへ奇才オウアイ長たり近くは最新式の鐵鋼君たる者大いに自重し次回

屋

湯

本

運送株 式會計

る。何人も目標として進む一吾小名濱はこく數年間邁進備なかるべからず。

水

產

٤

人

物

海水温度も是亦例年にな

)に依るさ同地本年の

年以後しか見當ら

べきである。

(-)

其の統計より述れば七年より來月上旬には一度に豐なかつた程に小名濱になくに志した。

漁を見るのではあるまいかてならぬ人物である。

男が好くて業株式會社を創設し、

韓印刷人伊藤 每月十、廿、卅日發行 定價一ク年 三十 圓錢

清清水正

世正界宗

鐵

小名濱川(電話六)

本紙讀者諸君

産學校も必要であらう。 意を拂ふこと、平易なる水

は海水温度が

測候所長

度より甚しきは六度位に た。其の高低の差は約三 旣に一年有餘熟考し、且 私は淺學韭才の身を以て操一元來吾が磐城水產新報は先|知らず現時の漁業は何物に に趣意書にも申述べし如く 險なりとすれど、 昔はいざ 世間は一般に海の事業の危

偏不黨嚴正中立を標榜する青年の灼熱的元氣が其のも 起つ以上是々非々嚴正たる 起つ以上是々非々嚴正たる海、水産、を理解させること 面會日ヲ通知ス新聞紙は社會の木鐸として通り、子供の單調なる時に希望者ハ本人來談 私は政治に對しては所謂不れの事業に置きましても、 端を披瀝して、諸賢の批判すして、老人或は移住者の 茲に常に抱懷する所信の一 惜しまざるものである。 先輩にも計り、而して弦に使命を完する為め生れたの ものである。中央地方共權のく中堅をなすやうでない を乞ふ次第であります。 の爲めに粉骨碎身の努力をは中心勢力を失ってないで 蹶然起つて地方水産界産業|であります。 つ|地方産業の發展擁護に其の|業である。 やうです。何れの階級、何 真に働て居る人は青年に非 しょうか、即ち漁村に於て 現在の我漁場 支局長 金を抱いて安眠し得ざる資 寳庫に投資さるべきである 本家は無限渺々たる大洋の も勝る、尤も安全有利な事 支局開設

海、水産、を理解させること 小學校にも水産の特課に注 御 御 屋難 海理 Ħ

茨城縣多賀郡 勿來町字關田 神永恒重氏

漁

業

水

產

家

1

野

德

进

小野倉之助

業

家

水质産

<u></u>

政

水

醬油釀造太物商 漁 漁

業

水

家

水產

F

順

II.

華於衛 源 展了

譽

城

灰

礦

格式會試

名

松本憶光即 漁

水

家

崎

武

K

衛

开白 劃 園 業

10

M

次

鳳

腦神 盖 JL 威 蒲醬 鉾油

場 製醸 造造 業 酸素 業所

院 主 江 木 名町出 齒 科 張 醫 藤 所 院 國 藏 IE

上神白鑛泉 胃腸病に特効あり

たる記錄よりない、其のと、本年は寒流の勢力が旺君を評するに小名濱の小野」而して君は達眼の士だ、世時、獨り羨望の的となる、中、物質を離れ精神的に真は築港工事當時に觀測し依つて以上を綜合考察する「不日某新聞紙上、我が小野」防組頭も經、現に町議たりは不況の絶叫に耳を痛むるせば、君を取卷く家子郎黨

觀測は大正七年より十三|盛なるが故に魚類の來襲も|晋平か、小野晋平の小名濱|は各方面に行詰り進路に惑|吾小名濱の町長を補佐する|劔に一命を投出しても蓋す

|か、と筆者も別に腹を立て|ふ時、君は此大平洋の征服||君ある豈偶然ならんや。君||人幾人ありや、大將たる者

||弦に一百萬圓の磐城水産工||なき事と筆者は堅く信ずる||卒なし、

海產 物 商業 黑 Manual Ma 

25

新館落成